

12月25日

天候：晴れ

6:10 松本駅 BT

7:25 信濃大町駅

8:35 狩野家

8:45 行動開始

10:35 東尾根に合流

12:10 P1

13:30 1880 で幕営開始

14:30 デポ隊を出す

15:30 2000m 地点でデポ

16:00 デポ隊が幕営地に到着

17:30 夕食

2016年の冬合宿が始まった。朝の信濃大町駅周辺に雪は積もっていない。駅のコインロッカーに荷物を預け、タクシーが来るのを2,30分待つ。余談だが、このコインロッカーは400円/日の料金設定であり、驚いた。今回の登山口にあたる狩野家に移動する車内で、今年はまだ雪が殆ど降っておらず、山にも積雪が少ないようだという話を聞く。狩野家に着き、ロングスパッツを装着して出発。道には踏み跡が着いており、道迷いすることはなかった。傾斜はなかなかきつく、キックステップのいい練習になった。幕営地まではある程度まとまった状態で行動しつつ、各自で休憩をとった。幕営地に到着し、テントを設営する。時に厳しい指導を受けながら、テント生活でのいろはを学ぶ。一時間後、デポ隊を出す。残った明坂、荒木、須賀の3名で水を作り、天気図を書く。デポ隊は無事に帰って来た。夕食を作り、v6に8人で集まって食べる。やはりテントは狭く、身を屈めて食べるのはつらかった。テント場の土台をしっかり作る必要性を感じた。

12月26日 池崎

天気：晴れのち曇りのち雪

04:00 起床

05:00 テント(1880m) 出発

07:07 事故発生(池崎滑落)

09:15 AC設営(2300m)

10:30 デポ回収隊出発

11:15 デポ回収(2000m)

12:30 デポ回収隊AC着

13:20 中本、明坂、土屋、須賀AC着

午前4時に起床し、手早く棒ラーメンを食べ、そのあとは急いでテントを片付けた。各自パッキングをし、アイゼンを装着し出発した。出発したときまだあ

たりは暗かったのでヘッドライトを付けて歩いた。前日にデポをしていたので少しは荷物が軽かった。前夜にほとんど雪は降っていなかったようでトレースをたどって歩いた。2000mのデポした場所につくとデポしたもののうちすべてを回収するのは困難だったため、重い食料だけ回収し、ACを設営した後再び回収隊を出すことにした。途中かなりの急登がありきつかった。ナイフリッジ手前で山崎のアイゼンの片方が外れていることが分かり、山崎は一人で少し戻った。下り坂になっているナイフリッジで池崎がアイゼンの前爪を木にひっかけ、体勢を崩し転落した。崖のような場所で、下にはむき出しの岩があったが、運よく岩には当たらず、また雪がふかふかだったためピッケルストップをせず止まった。無傷であった。池崎救出のため山田、土屋が安全確保しながら池田が池崎のいる位置まで降りた。その後は一年の荒木、池崎そして池田がコンテを組んで歩いた。途中からかなり風が吹き始めた。幕営地につくと皆で整地をし、テントを設営した。少し休んでからデポ回収隊（山崎、池田、山田）が出発した。土屋は同時に出発したがデポした場所からさらに下り、中本、明坂、須賀のサポートをしに行った。デポ回収隊が到着し、さらに中本らが到着しやっと冬合宿の隊員が全員そろった。そのころには雪が降っていた。夕食は一つのテントに、ぎゅうぎゅうだったが集まり皆で食べて楽しかった。

12月26日 明坂

明坂・須賀隊

天気：晴れ→曇り→雪

4:00 起床

6:05 出発

7:35 狩野家

8:10 中本と合流

10:50 1880m テン場

13:20 2300m AC

荷上げ隊と同時刻に起床。棒ラーメンを手早く食し、5時過ぎに荷上げ隊を見送る。

6時の出発時はまだ薄暗かったものの、トレースははっきりしており道迷いの心配はなかった。アイゼンを履いていたためぐんぐん降ることができ、1時間半で麓の狩野家まで到着。数分後に中本と合流することができ、デポを回収して登り返す。昨日の気温のため、尾根に上がるまでの道は雪が融けてしまっていた。尾根上でも一部急坂はクラストしており、登りでもアイゼンを着用してどんどん登った。9時の定時交信は繋がらなかった。11時前にテン場に帰り着き、早々に撤収作業に入る。11時の交信は撤収に気をとられ忘れてしまった。その後は荷上げ隊が残してくれたトレースに沿ってACまで足を進める。さきほどまで空身だったこと、予想以上に荷物が多かったことから、ペースが落ちる。あの須賀から重いという言葉聞いた。40分程登ったところで土屋がサポートとして下りて来てくれたので、共装を一部持ってもらう。お蔭で少し余裕ができた。ACまでは急坂が各所にあり、東尾根が想像よりもハードであった

ことを知る。池崎が滑落したという地点では須賀に注意を促したが、難なく通過できたようだ。13時の交信でようやく連絡を取ることができ、お互いの行動の概要を報告。その後すぐ AC に辿り着き幕営。合流できた安堵感からかなりの疲れを感じた。天気図によると翌日は低気圧が接近するため恐らく雪となる。夕食後は深夜までテント内で会話がはずんだ。

12月27日 荒木

天気：雪

5:00 起床

6:00 沈殿決定

8:20 テン場整地開始

11:30 テン場整地完了

19:30 夕食

前日の天気図から予想していた通り夜の間には寒冷前線が通過し、西高東低の気圧配置が形成されて強い風が吹き付け始めていた。夜の間には 50 cm くらいであろうか、かなりの積雪があり、あたり一面が雪で埋もれていた。明け方にライチョウの鳴き声を聞いた気がしたが、他に聞いた人がいないので定かではない。この日の天気は悪いままであろうし、前二日で予定よりも高度を稼いでいたこともあり休養もかねて沈殿することが決定した。沈殿決定後もうひと眠りしてから雪に埋もれたテン場の整地やトイレづくりなどを行った。普段あれほどたくさん雪と触れ合うことがないため慣れない作業だったが、より良い居住環境のために頑張った。整地後はテント内でエッセンを食べたり睡眠をとったりと体力回復に努めた。この日の天気図を見る限り冬型の気圧配置は翌日までもつれ込み、その後は移動性高気圧が来る可能性が高いということで翌々日がアタックに適していると結論付け、明日は沈殿との仮決定がなされた。昼間に十分休んだためか夜はなかなか寝付けなかった。

12月28日(水) 土屋

天候：雪のち晴

6:30 起床

8:00 アタック決定

8:50 出発

9:45 矢沢の頭

11:45 爺ヶ岳中峰

13:00 AC 帰還

16:50 夕食

前日の気象予報によると、28日は寒冷前線の通過に伴い荒れるということだったので、この日は沈殿のつもりで遅めに起床した。しかし、起床した段階では天候はそこまで荒れておらず、行動には差し障りのないものだったが、もしかすると時間がたつにつれて風が出てくるのではないかという危惧があった

ため、のんびりと朝食をとった。朝食が済んだころ、今後の活動を話し合うために、池崎隊員の携帯で天候を調べることになった。この行いが今合宿に大きな確変をもたらしたのだ。なんと、当日の天候は雪がある程度降ったのちには晴れるという予報であったのだ。さらに、この日を逃すと天候は急激に悪化し、下山すら危ぶまれるほどであった。すなわち、突然にチャンスが巡ってきたのである。山崎隊長がアタックを決断するのに、そう時間はかからなかった。

出発準備中は強い風が吹き荒れ、それにつられて積もった雪が舞い上がり、耐えがたい寒さを感じさせられた。ここにきて今合宿中一番の寒さに襲われ、身体の各末端の急速な冷えを味わい、気持ちの面での勢いはほとんど失われていた。さらに、気温が氷点下を下回るがゆえにアイゼンのヒモはガチンゴチンに凍っており、思うように靴と本体を締め上げることができない。想像以上に苦戦を強いられ、迅速な出発はかなわなかった。他の隊員も手を焼いているようであったが、今年の冬山経験者は難なく準備をこなし万全という状態であったので、経験の差を感じずにはいられなかった。

やっとの思いで出発したが、夜に降り積もった雪が予想をはるかに超えて多かったため、スタートからラッセルが必要となった。隊長がラッセルをした道を二番手の自分が踏み固めてゆく。先輩の後ろ姿を見ながらこのアタックが成功するビジョンを頭の中でイメージしてみたが、気持ちが半ば折れてしまっている自分には難しいことであった。5分が経ったであろうときに、隊長とラッセルを代わった。胸まで積もった雪を前に、またしても気持ちがそがれた。

やはりラッセルはきつかった。足が手で掻いた雪に埋もれてしまい自由が利かず、必死になって抜け出した足で、必死になって足場を固めようとするものなかなかそうはいかない。そうやってじたばたしていると体力は一気になくなり、敢え無く交代した。きついと思ったらすぐに交代するというのがラッセルのルールであるらしく、なるほど時間短縮にはその方がいいなと思った。ラッセルが二周したぐらいで、矢沢の頭とであった。

開けた場所で1年生を上級生で挟むアンザイレンをとった。ワカンを付けたまま行くか少し悩んだが、そのままで行くことにした。そこからは先ほどのような胸まであるようなラッセルはなかったため比較的体力を使わないで済むものであったが、やはりこれまでに相当量エネルギーを消費していたため、身体の疲労は大きかった。それでも前に進んでいくのだが、いつまでたっても山頂らしきものに出会わず、それどころかピークを目で確認することすらかなわなかった。雪で隠れて見えないが、足元が岩稜帯であることは確認できたため、山頂まで遠くはないと思われるが、なかなかそれらしきところに出ない。それは我々が目標とする中峰を通り越して、北峰まで向かってしまっているのではないかと感じるほどだった。順調に足を進めたところで、ようやく山頂と思しきピークが見えた。付近の足場は凍結状態に近かったため、アイゼンだけで十分だった。一年生に注意を呼びかけ、慎重に登り、山頂に到着。

ACに戻る際には、強風のためかラッセル痕は消えていた。しかしながら今度は下りなので、そこまで体力の消費は気にならず、上りの約半分の時間で帰還できた。

12月29日 山田

天気：晴れ

4:30 起床

6:05 AC 出発

10:10 狩野家

4:30 に起床し手早く朝食をとりテントの撤収にとりかかる。竹ペグの回収に四苦八苦する。明るくなり始めた 6:05 に AC をあとにする。危険箇所であると判断したナイフリッジ 1 箇所と傾斜のきついところ 2 箇所の計 3 箇所で Fix ロープを張った。急傾斜をおりた先では複数のパーティーとすれ違った。途中幾度も木に引っかかったりしながら長い東尾根を進んだ。東尾根の樹林帯では往路と少しトレースが変わっている箇所があった。東尾根から狩野家までの急登では雪はほとんどなく道は土が露出していたため途中でアイゼンを外した。ぬかるんだ土に木の根っこ、さらには落ち葉というスリップするファクター満載の急登を下界への憧れの根性で下降し、10:10 狩野家に到着。下山完了。

～係反省～

医療

今回は合宿中に怪我の手当て等を行うことが殆どなく、係りとして行ったのは事前準備だけであった。合宿前に行ったことは、医療箱の中身と各薬の使用法の確認、凍傷、低体温症、骨折、捻挫への対処法の学習である。包帯の巻き方も学ぶように言われ、ネットで調べた。しかし、実際に人を相手に試すことはしなかった。実際に山で誰かが怪我をした場合、素人である自分は頭がパニックになってしまうことも考えられるので、合宿前に練習をして体で覚えておくべきだったと思う。同様に、凍傷や低体温症の治療も何人かでシュミレーションしておくべきだったと思う。(須賀)

今回の合宿には医療係として参加した。出発前には、医療箱の中身の確認、そしてその使用方法、効果などを把握し、起こりうる事態に対し最適なイメージを持てた。反省点は3つある。一つ目は、医療活動の体全体での認識をもっと広めるということである。それは万が一医療係である自分を含めた複数名での事故が起こった際である。その場合、当然自分は医療活動が行えい。そのような事態のために、研究発表の段階で全員に最低限の医療知識、医療箱の中身を伝えておくべきであった。二つ目は、医療箱の中身の買い忘れである。今回の合宿の計画段階では、低体温症対策として、特別にビタミン剤を医療箱に追加することになっていたが、個人の準備等の忙しさで買い忘れてしまった。幸い、合宿中でそのような症状は見られなかったため良かったが、このようなことはないよう注意したい。三つ目は、緊急時に医療箱を瞬時に取り出せなかったことである。実際、自分はすぐに取り出せるよう雨蓋に医療箱を入れていた。しかし件の事故が起きたとき、医療箱は様々な物に埋もれ、なかなか取り出すのに時間がかかった。医療箱は、蓋の中の最上位におくべきである。

(土屋)

食料

今合宿でも夏と同様食料を担当した。反省すべき点の一つ目はもう一人の食料担当の池田先輩に任せてしまったことが多かったことだ。朝食夕食を担当したが、これらはメニューがもうすでに決まっていたも同然の簡単な仕事で、エッセンを池田先輩に丸投げしてしまったのは申し訳なかった。また買い物リスト作成も任せてしまった。結局、諸事情により私が作成したが、いろいろ任せてしまった自分も悪かったと思う。二つ目はメニューを決める際に、実際合宿で一つのテントに集まって食べるのか、別々のテントで食べるのか、またどのような手順で、鍋をいくつ使って作るのか、何も想像をせずに決めていたことだ。これによって歩荷わけの時にこの問題が浮上し、直前になってあれこれ決める羽目になった。きちんとしたイメージをもってメニューを決め、買い出しの時にどのようなものを買えばよいか指示できるようにすべきだった。今合宿できづいた改善点はペミカンの食材と調理法だ。結構な量の食材をペミカンに入れたつもりだったが、食べてみると食材がほとんど感じられなかった。また全体的に食材はもう少し大きめに切ったほうが良かったかもしれない。今回はペミカンづくりに参加できなかったのであまり詳しくはわからないのだが。(池崎)

今回の合宿では、後輩と二人で食料係を担当した。あまり日程も多くないということで、そこまで考える量も多くなさく大変な作業ではなかったが、後輩に頼ってしまったことが多かった。まず、研究発表のときに発表する献立を考え始めるときに遅すぎて後輩から催促されてしまった。挙句の果てには最終的な献立を提出する期間までも遅らせてしまい、後輩に買い物リストやエッセンの献立を丸投げしてしまう有様だった。先輩として、指導していかなければならない立場であっただけに本当に申し訳なく思うし、後輩には感謝したい。

また、去年も冬合宿を経験していたにもかかわらずエッセンでは凍って食べづらい食品を選んでしまうなど、あまり去年学んだことが活かされていなかった。

今回の係の活動全体を通して、後に後に引きのばしてしまったことが悪い結果を生んだ原因だったと思う。次回からは早めに行動しはじめたい。(池田)

## 交通

今合宿では京都まで青春 18 きっぷ、京都から松本までは夜行バス、松本から信濃大町まで電車、信濃大町から狩野家はタクシーを利用した。夏合宿と比べハプニングもなく、当日はスマートな移動ができたように思う。反省というほどではないのだが当日はクリスマスというのもあるのかジャンボタクシーがすべて出払っており往路ではジャンボタクシーを予約することが叶わなかった。2週間前に予約の電話を入れたのだが、日程がわかり次第、予約の電話をしていれば良かったように思う。(山田)

## 気象

天気図は行動中毎日書き、1年にもテント生活の一部として教えることができた。しかし予報についてはまだ実力不足を感じ、ヤマテン(今回は山田のお父様からヤマテンの情報を頂くことができ、非常に大きな手助けとなった)の

予報とは噛み合わないこともあった。ラジオ天気図で得られる情報は正午のものであるため、翌日の天気を予測するのはかなり難しいと感じた。その中でネットを通じて各社の天気予報なども確認していたのだが、私の携帯の通信量が上限に達してしまい、それ以降は荒木や他隊員に情報収集を任せてしまった。冬山ではネットの天気予報も重要なので、今後は同様のミスが無いように気を付ける。(明坂)

事前に冬山の気象について自分の納得のいくまで調べ、実際にそれを体験できたことは良い経験になった。今合宿では天気の予報はほとんど先輩中心で行ってもらったが、その天気の決定の根拠などを自分でも理解することはできたので、これからは自分でも予測を立てていけるように練習したい。反省点としては天気図を書くのが遅いうえその割に見やすく書けていなかったことで、特に等圧線は自宅で書くときのように書き直しがきかず、パッと見たときに見にくいものになってしまった。気象に関しては日ごろからの勉強・練習の積み重ねが実践では重要になってくることを痛感した。(荒木)

～個人の反省～

山崎

山岳部の一員として最後となる冬合宿であったが、ひとまず全員登頂という目標が達成できて本当に良かった。CLとして後輩たちには多くのことを教えてきたし、逆に多くのことを教えてもらった。リーダーに必要なものは、常に最良解を模索することであると考えている。いつ何が起こるか分からない山の中で常に準備をし続け、冷静に物事を判断する力、これが山のリーダーには必要である。自分にそれができたかわからないが、夏よりも成長していたと思う。私の代は冬合宿に参加をする同輩がおらず、困難なチャレンジをすることは難しかったが、来年以降は部員も豊富におり後輩には、経験値の高い先輩、共に山に登る同輩が多くいるという恵まれた環境にいることを自覚し、さらなる高みを目指して欲しいと感じた。

また、反省となっていないことは重々承知しているが、私の思いの丈をここに記したいと思う。私が山岳部に入った理由は、自分の足で、目で、体で冬山を感じたいと思ったからである。浪人生の時にテレビで見た冬山特番に私の心は魅了された。そして自分もこの場所にたちたいと強く願うようになった。一年生の時初めて冬山に行った時、稜線からアルプスを眺めた時のことは今でも鮮明に覚えている。冬山には多くの魅力がある。一年で山が最も美しいのは冬だと私は思う。だからこそ後輩達には、冬山に来て欲しい。せっかく山岳部に入ったのだから、恐れずにチャレンジして欲しい。無茶をしなければ冬山は想像以上に手の届く場所にあることを知って欲しい。大事なのは親の許可ではなく、チャレンジする勇気があるかだと私は思う。大学卒業後個人的に冬山に行こうとしても知識がなければ恐らく無理であろう。部活に在籍している期間が人生のうちで冬山にチャレンジできる唯一のチャンスであるということを私は後輩に伝えたい。

最後に、今回の合宿に関わってくくださった OB の方々、同伴していただいた中

本先輩には感謝いたしております。本当にありがとうございました。

明坂

まず反省すべき点は、出発当日のアイゼンのサイズの合わせ忘れである。ヒマラヤ遠征の際に合わせたはずだと確認を怠ってしまった。そもそもヒマラヤ遠征の際にもサイズを合わせ忘れていたので、結局アイゼンが短く着用できなかった。対策としては、荒木がアイゼンを伸ばす方法を知っており、それを実践することで解決した。しかし本来は出発前に発見、解決しておくべき問題であった。本当に情けない限りである。今後は装備の確認を徹底しなければならない。

また、行動中にも判断力不足を感じたり、ザイルワークがあやふやな点も見つけた。2年であるにもかかわらず、十分な実力が伴っていないと感じた。来年は3年として隊全体を引っ張らなければならないため、知識の不足を補い、今までに学んだ知識の復習も行なう必要があると感じた。

池田

今回は冬山を経験した人が自分を含めて4人しかいなかったもので、自分は冬山でのいろいろなノウハウを教えていかなければならない立場だった。結果的には後輩にそのノウハウを伝えることができたと思う。また上級生として行程の中でも引っ張っていかなければならない場面が多く、先頭に行くことも多々あった。今回は体力面で迷惑をかけることはなかったが、冬合宿前のトレーニングが去年よりも足りておらず不安を持ち続けながらの行程だった。爺ヶ岳の先の鹿島槍ヶ岳まで行っていたら、バテてしまっていたのではないかと思う。さらに初めて後輩が滑落する場面に遭遇し、衝撃を受けた。今回はあまり急な斜面ではなく、本人もほぼ無傷だったので良かったが、山では重症を負う危険性もあるので常にその状況を頭に入れながら上級生は行動しなければならないと感じた。来年度からは最上級生として全員の行動を把握しておかなければならないので、全員に気を配りつつ、模範となるよう心掛けていきたい。

土屋

自分にとって初めての冬合宿であったが、昨年の春合宿で雪山生活のノウハウは身に付けていたため、積極的に動くことができた。また、それを一年生に教えてあげることもできたので良かった。体力面に関しても、隊から離脱してしまうこともなく、しっかりついていくこともできたと思うので、そこは一つの自信としたい。反省すべき点は2つだ。1つは、装備の確認である。というのも、部活から拝借したオーバーミトンが両方とも左手用であったのだ。しっかりと確認したうえで、合宿に臨むべきであった。二つ目は、山域の把握が完璧になされていなかったことだ。先頭を歩くときにはすべて赤布に頼る形になってしまい、山域調査が不十分であったと反省した。せめて、行動の目安となる各ピークがどこに位置しているのか程度は把握しておくように心がけたい。

山田

冬山初参加であったが、総じて振り返ると春山と比べ疲れしました。断続的な降



雪による雪かきというものは想像以上にきついものであった。経験者にノウハウを教わり、やり方を覚えられたのは非常にいい経験になりました。ご指導してくれた方、ありがとうございます。

下山の際、危険なところを一年生、一人で歩かせてしまった。もっと二年同士で声を掛け合って連携せねばならなかったと思う。僕はテントがエスペース組であったがテント兄弟の中本先輩、明坂、須賀はお互いが居心地のよい空間にしようと気を遣ってくれているのがひしひしと伝わってきた。(ありがとうございます) 冬山合宿という過酷な環境であるからこそ、お互いに気を遣って快適なテントライフをクリエイトせねばならないという重要性を改めて感じました。といっても極寒の中、狭い空間で時を過ごすというのはストレスの溜まるもので精神的に疲弊しました。仕方のないものだろうか？もっと強靱な精神を構築したら精神的に疲れないと現段階では考えています。精神面を鍛えるのは歩荷が有名であるが、いくら歩荷してもこの側面をカバーできる精神を鍛えられるとはあまり思われたい。年上の方がある日言っていました、楽しみながら山積しているタスクを切り崩す発想を身に着ける。これは簡単なことではない。ただ、この言葉を意識しつつ膨大なレポートに追われたり、部活でのきつい練習、長時間にわたるバイトが待ち受けていようとも不満をもらさず楽しみながらトライすることを意識していきたい。最後になりますが、厳冬期の北アルプスの一峰を踏みしめることができ僕は幸せ者です。パーティーのみんなのおかげです、ありがとうございました。

## 須賀

今回の冬合宿では、5つの反省点があった。①事前に医療の練習をしなかったこと②テント設営の際に注意すべき点を守れていなかったこと③アイゼンとワカンの装着法は覚えていても、2つを一度に装着する方法を覚えていなかったこと④体力不足⑤パッキングが下手の5つである。

- ・ 係りの反省に書いているので省略。
- ・ 藤山先輩から教わったことを覚えてはいたが、その教え再現しきることができなかった。思っていたよりもテント場作りのスピードが速く、注意が行き届かなかった。
- ・ アイゼンの前爪をワカンの内側に入れるということを忘れていた。アタック中に先輩から指摘を受け、隊の行動を一時中断させてしまった。
- ・ 事前からトレーニングは積んでいたが、26日のACへの移動の終盤はバテてしまった。距離が長いこと、荷物が重いことに加え、歩いたのが慣れない雪の上だったことが影響したと思う。ゴールが土屋先輩に荷物を持ってもらった後は、標高が高くなったこともありテンションが上がって、なんとかなった。低い標高の場所では飽きてしまうのかよくバテる。景色だけでなく、会話も楽しめるようにしなければいけないと思う。
- ・ どの荷物をどこに入れるのかを事前に決めていなかったのも、

出発前に時間がないときなど、パッキングが雑になった。先輩からの指導を受け、パッキングのいろはを習得できたと思う。

ここまで気分の重くなることばかりを書いたが、合宿は予想よりもはるかに楽しかった。テント内での生活は思っていたよりも快適であったし、先輩方からは優しくして頂いた。アイゼンとワカンは行動中に外れることがなく、雪をいじってテント場やトイレを作るのは楽しかった。苦手であるような気がしていたラッセルは思っていたほどきつくなかった(すぐ交代してもらったし、一度しかラッセルをすることはなかったが)。そして何よりも、アタック帰りの稜線上で空が晴れた時の景色は、雲の上を歩いているようで感動した。今合宿につれてきてくれた先輩方に感謝します。

### 池崎

反省すべき点は三つだ。一つ目は滑落したことだ。原因はアイゼンを木にひっかけ、体勢を崩してしまったことだ。ナイフリッジだったので注意しながら歩いていたが、木があることに気づけなかった。また落ち始めてからは体がかなり速いスピードで横に回転していて、ピッケルストップをしないといけないと考えてはいたが全くできなかった。今回は幸運にも無傷でしかも雪がふかふかですぐ止まったので良かったが、何かあったら隊員の皆に迷惑をかけてしまうし、親にも迷惑をかけてしまう。以後、下り坂は細心の注意を払って歩きたい。また親に迷惑をかけるとはこういうことなんだと分かり、絶対に迷惑をかけたくないと思っただ。二つ目はアイゼン歩行だ。滑落の後というものもあったが、下り坂は怖がりすぎて腰が引け、危険な歩行をしていた。合宿の中でも最後のほうでは少しは改善していたが、まだまだだと思っただ。早く習得したい。三つめは荷物の用意が他の隊員と比べ、圧倒的に遅かったことだ。別次元の遅さだった。用意が遅いためテントの片付けを先輩たちに任せてしまっていた。非常に申し訳なかった。それにもかかわらずパッキングは隊の中で最後まで時間がかかり、他の隊員が出発しているときにはまだアイゼンをはめているというありさまだった。細かすぎることは気にせず、ある程度は大雑把にしなければならぬと思っただ。また日頃から自分の荷物の片付けをしようと思っただ。これは夏合宿の時にも書いた。次の合宿では直したい。

### 荒木

今回 1 年女子の冬山参加はかなり稀なことと聞き、正直迷いもあった。特に、他の隊員と比べると明らかに体力面で劣る私が参加することで他の隊員の負担が増えてしまうことは目に見えるし、私自身が行動についていけるかも不安だった。しかし夏合宿後からかなりの間悩んだ末にやはり冬山に行きたいという気持ちが強く、参加を申し込ませてもらった。参加を快諾してくれた隊の皆さんと、冬山行き許してくれた家族には本当に感謝している。

合宿で考えさせられたのは女子の山行について、特に体力面だ。個人的に、女子だからできないという理由付けが嫌で、今まで何とか皆と同じパフォーマンスができないかと画策していたのだが、今合宿でそれを実現するのは難しいと

認めざるを得なかった。だからといってこの差を埋める努力をやめるわけではないが、今までのように単純に重い荷物を背負って登ることだけを目標とすると私が男性陣に匹敵するのは非現実的ならば、私が目指すべきは何なのか。答えは現在模索中であるのもう少しお待ちいただきたい。今後はとにかく漠然と練習をこなすのではなく、目的をもっていろいろと試してみたいと考えている。冬合宿に参加して、雪山登山のノウハウを学ぶこと、冬の北アルプスの山頂に立たせてもらえたことに加え、自分がすべきことを今一度見直す機会が得られたことは大きな財産だと思う。実際今回は先輩方に完全に連れて行ってもらっただけであり、自分の無力さが身に染みて悔しく、情けなかった。次は隊にいることの価値をなにかしら自分で生み出し、またリベンジしたい。